

# 医療経営士への緊急提言

## 医療経営への影響が深刻化するなか 医療経営士は存在感を発揮せよ

緊急事態宣言は解除されたものの、新型コロナウイルスの感染者数は再び増加に転じている。経営への影響が日に日に深刻化するなか、医療機関のマネジメントを専門に学んだ医療経営士はどんな役割を果たしていくべきだろうか。日本医療経営実践協会の役員から緊急提言をいただく。



急性期医療ほど経営の落ち込みが激しい  
社会医療法人美杉会と社会福祉法人美郷会では、27施設、69事業を展開しています。今回の新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、特に美杉会は大きな影響を受けており、今年4月における全体の医療収入が前年比でマイナス10・5%でした。傾向をみてみると、急性期医療の色合いが強い施設・事業ほど減収幅が大きくなっていました。

例を挙げると、一般120床の佐藤病院は前年比19・9%の収入減、一般127床、回復期リハビリ47床、緩和ケア25床の男山病院は同8・8%減でした。5月もほぼ同じ結果となりました(表)。

佐藤病院は病床稼働率100%、年間救急搬入件数・入院手術数ともに2000超と、同規模の医療法人の平均を大きく上回る実績を出していますが、経営はかなり厳しい状況で以前から赤字でした。それが今回のコロナの流行によって、さらに赤字幅が拡大しています。また、男山病院については経常収支が赤字に転落しました。

急性期医療ほど落ち込みが大きい原因はこれから分析する必要がありますが、待機手術や内視鏡検査、定期検査などを延期したことによる影響は非常に大きかったと考えています。5月は4月と同じ状況でしたが、今後、どのように変化していくのかをしっかりと注視していく必要があるでしょう。

一方、介護事業については医療ほど大きな打撃を受けてはいませんが、事業によっては影響が出ています。傾向を分析するなかでわかってきたのは、要介護度が高い高齢者に対応する施設ほど影響が少ないということです。当グループでは特別養護老人ホーム、老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅、有料老人ホームを展開していますが、介護必要度の高い特養では変化は少なく、医療の度合いが濃い老健や要介護の低い人を対象とした住宅では利用者減や減収が起きました。

## 医療機関がピンチの時にこそ 医療経営士の力が必要とされる

佐藤真杉

社会医療法人美杉会理事長、社会福祉法人美郷会理事長／日本医療経営実践協会理事

表 新型コロナウイルス感染症が医療・介護収入に与えた影響

	4月	5月
社会医療法人美杉会	▲10.5%	▲10.6%
佐藤病院(一般120床)	▲19.9%	▲20.0%
男山病院(一般、回復期199床)	▲8.8%	▲8.8%
みのやま病院(障害50床)	▲5.6%	▲6.3%
社会福祉法人美郷会	1.6%	

## オンライン診療や物品管理 幅広い活躍を期待する

医療機関を取り巻く環境がますます厳しくなるなか、医療経営士の皆さんには経営の合理化・効率化を進めていただくことがもちろん大切ではありますが、それ以上に取り組んでほしいと思っ

うした時代に対応できるよう、準備を進めてもらえたらと考えています。

また、第2波・第3波や新型コロナウイルスに備え、マスクや防護衣などをはじめとする物品の整備・管理における役割も大きくなっていくでしょう。ただ、感染対策を優先しすぎると、経営環境が悪化する。経営と救急、がん治療など地域医療を両立させるバランスをとることが重要です。今回の経験を活かして、そうした取り組みを進めていただければと思っています。

さらに、経営的に打撃を受けた医療機関が少なくないため、さまざまな補助金や交付金を用意されています。それらの情報収集や取得に向けた用意も担ってほしいと考えています。一般的な医療事務ではなかなかここまで手が回らないと思いますので、医療経営士が率先して取り組んでください。

現在のような医療機関がピンチの時こそ、医療経営士の力が必要とされます。腕の見せ所だと思いますので、幅広い活躍を期待しています。

経営は厳しい状況が続きますが、私自身はコロナ禍で社会の連帯感を感じる事ができたのは、大きかったと感じています。普段はまったくお付き合いのない企業から、マスクなどの物品や食料の差し入れといった支援品が複数届きました。社会全体が医療に関心を寄せ、支援したいと考えてくれたことは非常に心強く、ありがたいと感謝の気持ちでいっぱい

です。そうした社会の思いに応えるためにも、一丸となってコロナに打ち勝ちましょう。